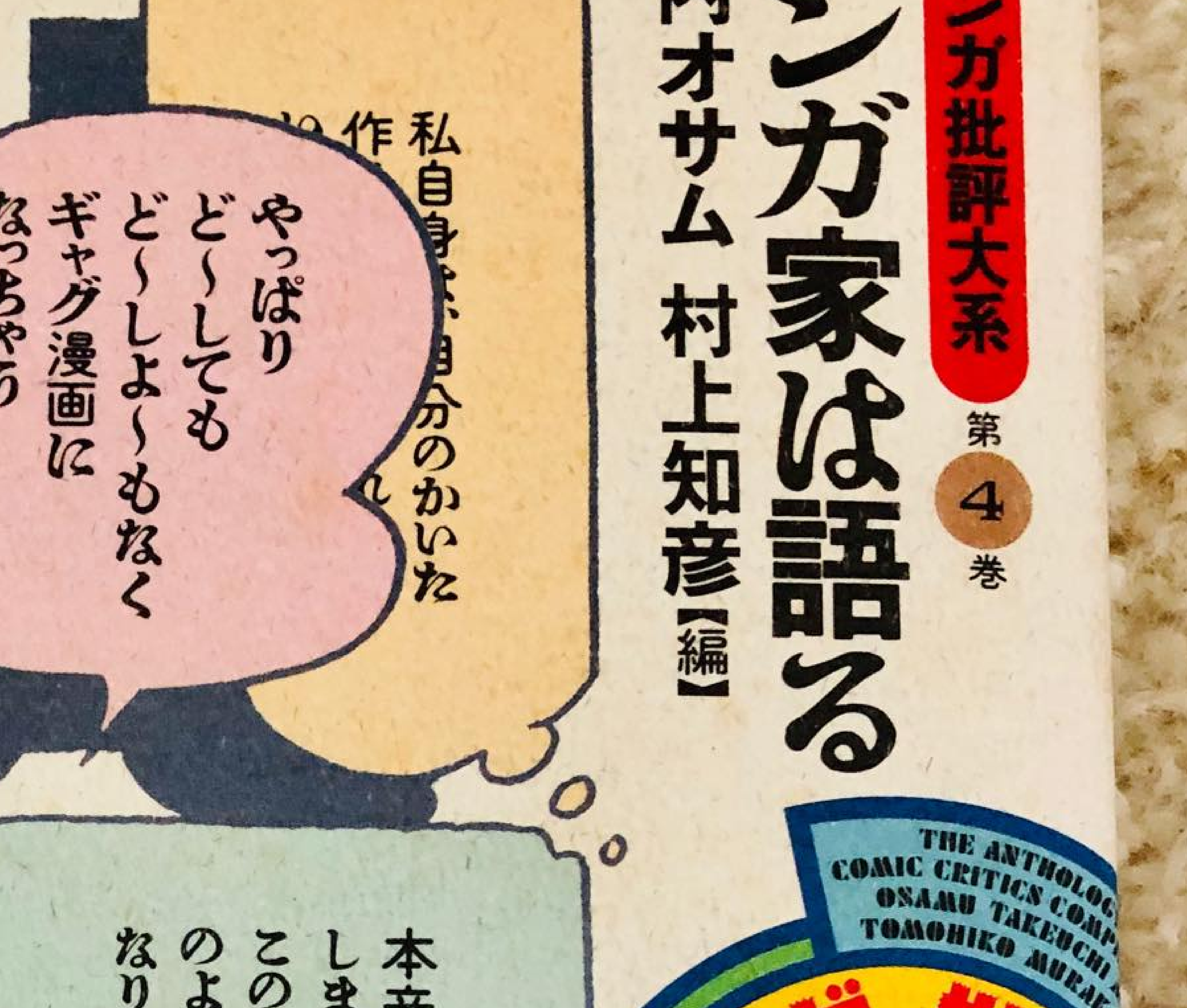
マンガ批評大系 第4巻

マンガ家は語る

竹内オサム 村上知彦【編】

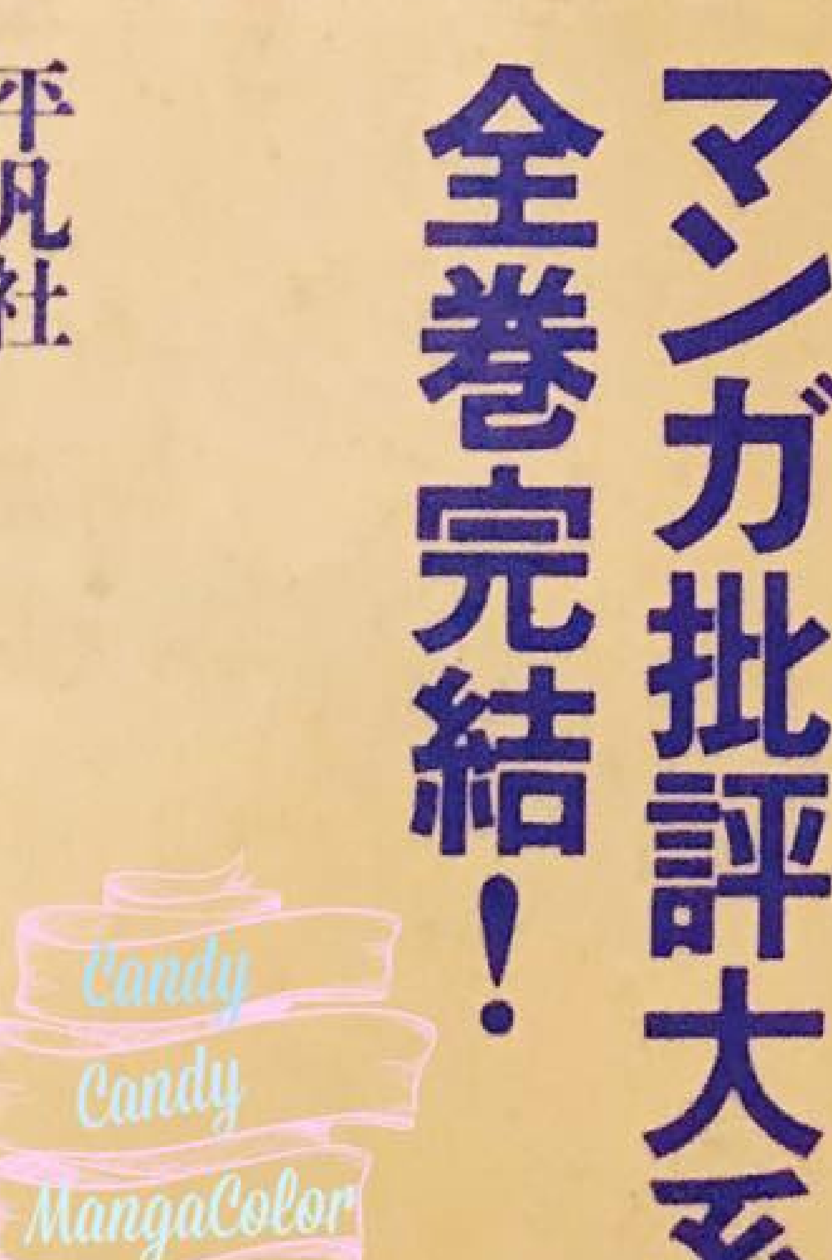


マンガ家に聞け！

岡本一平、
宮尾しげを
から大友克洋、
宮崎駿まで
代表的マンガ家
による貴重な
発言を収録

マンガ批評大系
全巻完結！

平凡社
定価一八〇〇円（本体一七四八円）




Candy
Candy
MangaColor


Candy
Candy
MangaColor



キャンディ♥キャンディ
絶賛放映中!
心にしみる愛と感動!
不滅の一大スイート♥ロマン
♥テリィを失ったいま、キャンディにとっては、アルバートさんのそばだけが唯一のやすらぎの場所だった。ところが、そのアルバートさんが、またまた不運な事故に……!
原作/水木杏子
いがらしゆみこ
おかげで水のんじゃったよ
それほどじゃないんだが……

我が友、キャンディ

なぎたけいこ　一九四九（昭和二四）年、東京に生まれる。ジュニア雑誌等で青春小説を書いていたが、七五年水木杏子の名で、「キャンディ・キャンディ」の原作を担当。この作品が大ヒットし、アニメにもなって多くの少年少女に親しまれた。以後、マンガの原作と小説を並行して執筆。本文は、「キャンディ・キャンディ」にまつわる作者の思い出を語ったエッセイ。

名木田恵子

十年、とつぶやいて驚いている。漫画の原作を書きはじめてから、もう十年たつのだ。漫画が子供のころから大好きだった私は、すすめられるまま何のためらいも感じずにこの世界に首をつっこんだ。

自分の書いた物語が絵になって動きはじめる——しかも、当時は行ったこともなかったパリやローマの街を舞台にして……それは、ワクワクするほど、楽しいことだった。

描きたい場所はたくさんあった。コートダジュールの海岸、シャモニーのスキー場、ニューヨークの裏街——その場所を想像するだけで、いくつものロマンスが映画のように目の前にうかんでくる。

小説なら入念に取材して書かなくてはいけない事も漫画なら許される。国籍不明の話でも充分通用するのだ。

ダブルデイト、クラスリング、ダンスパーティ、私自身、その国に生きているように何でもできる。

描きたい場所はたくさんあった

裏街――その場所を想像するだけで、いくつものロマンスが映画のように目の前にうかんでくる。

小説なら入念に取材して書かなくてはいけない事も漫画なら許される。国籍不明の話でも充分通用するのだ。

ダブルデイト、クラスリング、ダンスパーティ、私自身、その国に生きているように何でもできる。

仕事というより漫画の原作は私にとって優雅な道楽といった感じだった。が、半面、割りきれないものも時には感じていた。

原作は最終的には漫画家の力によって左右される。いくら自分では気に入った作品を書いても、満足のいかない結果もある。その反対に、よくこんなつまらない原作を、とできあがった作品をみて驚くこともある。どんなに考えこんで文章を書いても、つまるところ、漫画家がうまく絵にできるか否かで、作品が決まってしまうのだ。

どうせならいい漫画を残したい。

そんな時、編集部から、いがらしゆみこ氏とくまないか、と話があった。彼女の力量を知っていた私は大喜びで承諾した。

みなし児だが、どんな逆境にもめげない明るい少女、キャンディス・ホワイトはすぐに私の中から飛び出した。前から一度、ぜひ書いてみたかった少女だったのだ。アン（赤毛のアン）や、足ながおじさんにみられる少女のパターンは使い古されているような気もするが、やはり魅力がある。

それに少女（キャンディ）をとりまくさまざまな人々。その人たちも出番を待っていたように自然に私の前に現われた。一気に原稿を書き、それがゲラになってきたとき、私は目をみはった。私が想像していた通りのキャンディが笑っていたのだ。キャンディだけではない。できたてのパンのようなポニー先生、きびしそうだがやさしいレイン先生、そして、光にとけてしまいそうなアンソニーに、ハンサムなアーチー、そして、みるからにあたたかそうなアリステア――私はあらためて絵になった登場人物と出会い、熱い興奮がわきあがってくるのを感じた。もう何もしなくても彼らが勝手に動いてくれるだろう、と思ったのだ。

それはその通りだった。四年間の連載の間、物語作りに苦労したことは一度もない。私は彼らに導か

れて、歩いていくだけでよかった。
連載が終った時、担当だったS氏に、
「何のいさかいもなく平穏に終ったわね。四年間、こんなスムーズに連載がつづくなんて珍しいんじゃない？」
そう、うっとりいうと、S氏は目をむいた。
「冗談じゃないよ。もう！　すぎたことはすぐ忘れるんだから！」
いわれて、私はアッと舌を出した。
私は何度かゴネて担当といがらし氏を困らせているのだ。

「あ、そう。じゃあ私、原作おりる」
私は何度かそういっている。原作にクレームがついた時だ。長い連載の間には盛り上がらない回もある。かといって、原作を曲げ、別の方に持っていくわけにはいかない。連載をはじめた以上は書きたいように書きたい。で、そんな時、私はヤクザの姉さんになる。
そうですかい、あっしの意見が通らねえようじゃあ、原作書いても意味がありやせん。ようがす、おろさせてもらいやす——といった調子である。
漫画になる以上、原作者は影の人物だとはよくわかっている。が、作品が原作通り描かれないとしたら原作者など無用ではないか。
幸い、担当もいがらし氏もこんな私をよく理解してくれた。おどしにもわがままにも怒らず、今ふり返ると頭の下がる思いだ。
だが、ヤクザにもなれないほど、がっかりしたことが一度だけある。



それは物語も終りに近くステアが戦死する場面だった。

原作では、ステアは撃墜王と堂々と戦い、ヒコーキを撃たれ戦死することになっている。が、漫画の方は戦いの間にステアと撃墜王の間に友情めいたものがめばえたとたん、誰だか分らぬ第三者の手によりステアのヒコーキは墜（おと）される。何度かうちあわせたはずなのに出来上がった絵をみて私はショックで胸がふるえた。



水木杏子原作　いがらしゆみこ画「キャンディ・キャンディ」（『なかよし』1979年３月号）より



大事な場面だった。ステアを愛しただけに涙ぐみながらラストシーンを書いた。

戦争は甘いものではない。残酷で非情なものだろう。敵側と友情が生れるスキもないほど――私はそれも描きたかった。

漫画としては素晴らしい出来だったが、私は心に穴があいたような気がした。物語の大きな流れの中では、ステアが誰に撃たれようとそう変化はないだろう。どちらの死がより良いか判断もつきにくい。が、すべてに満足している物語の中で、ステアの死だけが私の中で漫画と違っている。

そのとき、私はしみじみと、これはたいへんな仕事だ、と思った。すべての原因は自分にあるのだ。私が担当も漫画家も一読して納得するような物語を書いていたら、私自身もショックをうけるような結果はまねかなかっただろう。長いつきあいで、私はいがらし氏に甘えている部分も多くあったかもしれない。もっと話しあうべきだった。〝一人〟で作っている作品ではないのだ、と私はその日痛感した。

四年という月日はやはり長い。

キャンディの物語が終りに近づくにつれ、私は霧の中を歩いているような気持ちになった。

最終回は、どこか美しい地で、ゆっくり彼女（キャンディ）と語りたい。そんなことを考え、私は晩秋のパリへむかった。

パリから急行で二時間ほどいったリュンヌという村にあるお城のホテル、そこで最終回を書こうと思ったのだ。

私にさまざまな幸福を与えてくれた彼女へのささやかなお礼の気持ちもあった。

思っていた以上にその森の中に建つホテルは美しく、部屋に通されたとたん、私は涙ぐんでしまったほどだ。

これで書いて下さい、というように部屋の真中におかれたアンティックなビュロー、壁にはキャンディにとって思い出深いきつね狩りの絵までかけられてあった。

私はその部屋で、キャンディと対話しながら最終回を書きあげた。ペンを置いたときの体が浮くような感覚はまだ残っている。

これでよかったのだ、いや、他にもっと書き方はなかったか――そんな思いとともに深い安堵感が私の中を漂っていた。

窓の外はもうまっ暗だった。

枯れ葉が流れる音が聞こえていた。私は複雑な思いで何もみえない外をみつめていた。

あの日から、もう何年もたってしまった。なのに、今も時々彼女のことを尋ねられる。その多くが、なぜキャンディとテリィをむすばせてあげなかったのか、というお叱りなのだ。

そのたびに私は、終ってもまだキャンディのことを思ってくれる読者の人々の気持ちに胸が熱くなり、みんなにとてもすまないことをしたような気がしてくる。

けれど、テリィと別れることは初めから決っていたのだ。キャンディには三つの愛を考えていた。アンソニーとの淡いはかない初恋、テリィとの激しい恋、そしてアルバートさんとの運命的な穏やかな愛――しかし、いがらし氏の描いたテリィがあまりにも素晴らしい少年だったため、人気が集中してしまったようだ。

私でさえ、テリィの動きにほれぼれし、胸をときめかせた。キャンディとテリィの別れのシーンを書いている時、やけに息苦しく、目の前がくもるのでどうしたのだろう、とペンを置き、ハタと気づくと、呼吸するのを忘れ、目は涙でいっぱいだった。

その場面を書き終ったあとも悲しくてたまらず、深夜一人で泣いていると起きてきたダンナサマがび

っくりした顔をした。身内の誰かが亡くなった、ととっさに思ったらしい。
あとで考えると、自分で物語を作りながらとおかしくなるのだが、書いている時は夢中でその世界にひたりこんでいる。
本当に愛しあっていても運命のいたずらで別れなければならないこともある——そんな思いをこめて書いた場面なのだが、自分が恋人と別れたようにつらいのだ。
原稿をわたしたあとも、しばらく私は重苦しい心をかかえていた。
後日、キャンディのアニメーションの声優さんたちとそのシーンの話をした。
「みんな泣いちゃってたいへんだったのよ。セリフにならないの、で、オセンベかじったりして気をまぎらわせながらふきこみしたの」
私はうなずきながら、鼻先がツンとした。
ほんとになんて幸福なんだろう、キャンディは——。
もとをただせば、たいしたストーリーではない。だが、漫画家により息をかけられ、あたたかい周囲に恵まれて、すくすくと育ってくれた。
漫画だからこそ描かれた世界——今や、キャンディは私の腹心の友だ。
そう、声をかければキャンディはすぐに私のところに戻ってくる。ポニーの丘で摘んだ花をいっぱいかかえて——。

『児童文芸』一九八〇年陽春臨時増刊号より

Sono molti gli eventi che hanno portato in gioventù Candice White Ardlay dall'America al Regno Unito, dove oggi vive. Ormai adulta, Candy rilegge con nostalgia la corrispondenza intrattenuta con amici e conoscenti incontrati nel corso di una vita, dall'infanzia presso l'accogliente Casa di Pony all'adozione da parte della facoltosa famiglia Ardlay, dall'anno scolastico trascorso nel severo istituto Saint Paul fino agli studi per diventare infermiera.
Le si stringe il cuore ripensando all'amato Anthony, che aveva creato per lei la rosa Dolce Candy, al travagliato rapporto con il tenebroso Terence, al legame indissolubile con l'ineffabile Albert, all'amicizia incondizionata di Stair, Archie, Annie e Patty, senza dimenticare l'eccentrico benefattore prozio William, che la adottò senza mai palesarsi, e il misterioso Principe della Collina, che la convinse da bambina ad affrontare la vita col sorriso sulle labbra.
Lettera dopo lettera prende forma il grande mosaico della vita di Candy, sempre pieno di imprevisti, gioie e drammi, dai primi del Novecento fino all'avvento della Grande Guerra: una ricerca della felicità che Candy ha sempre perseguito attraverso la speranza e la determinazione, senza mai arrendersi.

Keiko Nagita ci regala un grande romanzo epistolare, attraverso il quale una delle maggiori icone del Ventesimo secolo ci narra in prima persona la sua storia, aggiungendo numerosi dettagli – e addirittura un finale inedito – alle sue avventure, seguite e amate da sempre in tutto il mondo.

Keiko Nagita nasce a Tokyo nel novembre del 1949 sotto il segno del sagittario e si diploma in letteratura presso il Bunka Gakuin. Rivela fin da piccola una forte immaginazione, tanto da credere che un giorno sarebbe arrivato qualcuno, a bordo di una carrozza, pronto a portarla via con sé. A diciassette anni viene selezionata per un concorso di romanzi per ragazze, e due anni dopo debutta come autrice di questo genere narrativo. Contemporaneamente inizia a cimentarsi in opere originali nell'ambito del fumetto e collabora a numerosi racconti, quasi tutti ambientati all'estero, tra cui *Sanremo ni kanpai!*, la cui storia si svolge in Italia. Pubblica più di venti volumi ma, in seguito ad alcune considerazioni, decide di dedicarsi alla letteratura per l'infanzia. *Candy Candy* le vale, assieme a Yumiko Igarashi, il premio Kodansha per il manga, mentre come autrice del testo della sigla della versione animata riceve il Golden Disc. Grazie al romanzo *Reinette – Kin Iro no Ringo*, inserito anche nella lista delle letture consigliate, vince inoltre il premio assegnato dall'Associazione Giapponese per gli Autori della Letteratura per l'Infanzia, e il suo racconto *Akai Mi Hajiketa* è presente per molti anni nei testi scolastici della scuola elementare. Infine, il racconto per l'infanzia *Shampoo ji no Bouken* viene adattato in versione animata.
Vive su quella che lei stessa ha soprannominato La Collina Soleggiata Oltre la Salita del Latte e trascorre le giornate ascoltando la sua amata musica e le cantanti italiane (Mina, Ornella Vanoni...), continuando a immaginare innumerevoli storie.

Tout finit à la clinique Happy...

Désormais membre du clan Ardlay, Candice doit apprendre à se comporter en lady au collège Saint-Paul. Mais entre les vilenies d'Eliza et le règlement oppressif du pensionnat, difficile pour elle de se faire à cette nouvelle vie. Heureusement, Candy peut compter sur ses amis Stair, Archie, Annie, Patty et Terence, aussi épris de liberté qu'elle, pour rester toujours fidèle à elle-même. Malgré leur soutien, une ombre demeure au tableau : le souvenir encore vif d'Antony, dont Candy peine à faire le deuil. Or, il est temps pour la jeune fille de réfléchir à son avenir. Et, pour ce faire, il lui faudra trouver la force de se libérer de son passé.
L'heure est aux choix, pour Candy comme pour ses proches. Mais le chemin qui conduit au bonheur n'est pas sans heurt et peut parfois emprunter des détours inattendus...

Découvrez le dénouement tant attendu des aventures de Candy, voilé dans un récit aussi intimiste que bouleversant par Keiko Nagita, celle qui signa le scénario du manga éponyme sous le pseudonyme de Kyoko Mizuki.

Aunque la vida no ha sido fácil para la huérfana Candice "Candy" White, ella siempre sabe sacar lo mejor de las peores situaciones: cuando la separan de su amiga Annie, que es adoptada por una familia rica; cuando se convierte en la dama de compañía de la hija egoísta de una familia adinerada... y siempre sabe conseguir los mejores amigos donde quiera que va: los primos Cornwell, el romántico Anthony, el misterioso Albert, el apasionado Terry...



—Es una rosa nueva, un cruce que he hecho yo mismo. Lo he intentado incontables veces y este es el resultado —respondió Anthony por fin.

—Unas rosas tan importantes... ¿Y me las das a mí? —repitió la muchacha, conmovida.

—He estado mucho tiempo pensando en qué nombre darle a esta nueva flor y creo que ya he encontrado el adecuado. Lo acabo de decidir —susurró el joven, acariciándole la cabeza a César.

—¿Y por cuál te has decidido, Anthony? —preguntó ella.

—Dulce Candy —respondió él, volviéndose hacia ella con la vergüenza reflejada en el rostro.

«Dulce Candy...» En ese preciso instante, la joven sintió que el corazón se le abría de par en par, cual flor al amanecer. Durante los minutos que siguieron, los jóvenes se quedaron paralizados, mirándose a los ojos con un brillo especial en la mirada.

Después de 8 meses de espera, por fin me entregaron la traducción de esta valiosa entrevista.

Hoy hablaremos de los tres amores de Candy.

En los años 80’ Nagita la única dueña y creadora de Candy Candy, dio una entrevista para la revista Jidō Bungei revista para adolescentes.

En esta entrevista Nagita declaró los problemas que tuvo con Igarashi y el editor del manga.

Sinceramente querían apoderase de la historia de Nagita y crear el final que la gente estaba pidiendo.

Desde los años 70’s hasta el día de hoy, hay personas que no aceptan la verdad de historia.

Nagita escogió 3 amores para Candy: Anthony, Terry y Albert.

Algunas fans todavía se niegan a aceptar que Albert es el amor puro y definitivo de Candy.

Nótese que desde antes y después de esta entrevista, Nagita continúa diciendo lo mismo.

¿Cómo? ¿Dónde?

En las portadas de las diferentes ediciones oficiales de CCFS/ Candy Candy Final Story.

Leamos lo que dice la versión Italiana:

💓Su corazón se tensa cuando piensa en su amado 🔹Anthony, quien creó la rosa Dulce Candy para ella, en la relación problemática con el oscuro ▪️ Terence, en el vínculo inquebrantable con el inefable 🔺 Albert.

Nos damos cuenta que Nagita continúa mencionando estos tres personages.

Leamos la Versión Francesa:

💓Afortunadamente, Candy puede contar con que sus amigos Stair, Archie, Annie, Patty y ▪️ Terence, tan amantes de la libertad como ella, siempre se mantendrán fieles a sí misma. A pesar de su apoyo, una sombra permanece en su camino: el recuerdo aún vivo de 🔹Antony.

Nuevamente se mencionan a Anthony Terry y Albert.

Se preguntan ¿dónde dice Albert?

Pues el libro se llama:🔺Le Prince sur la Colline / Príncipe en la Colina, ya sabemos que es Albert.

Ahora leamos la contraportada de la versión en castellano:

💓Aunque la vida no ha sido fácil para la huérfana Candice "Candy" White, ella siempre sabe sacar lo mejor de las peores situaciones: cuando la separan de su amiga Annie, que es adoptada por una familia rica; cuando se convierte en la dama de compañía de la hija egoísta de una familia adinerada.. y siempre sabe conseguir los mejores amigos donde quiera que va: los primos Cornwell, el romántico 🔹Anthony, el misterioso 🔺Albert, el apasionado ▪️ Terry...

🌸Si. volvemos a leer a los tres amores de Candy...

La versión italiana habla del inefable 🔺Albert y el misterioso 🔺príncipe de la Colina, está palabra «misterio» que rodea a 🔺Albert, vuelve a mencionarse en Candy Candy la historia definitiva.

Definitivamente la historia sigue siendo la misma, lo único que cambia es que ahora Candy tuvo que decidir entre dos hombres, ▪️ Terry y 🔺Albert (palabras de Nagita para la revista Bulle Shōjo)

Pero Candy, se despidió de Terry nuevamente en la versión castellano (leer página 363) como en todas las versiones anteriores.

En la carta número 10 del epílogo exclusivo de Albert y Candy (Leer páginas 386, 387, 388) ella le escribe a Albert y nos cuenta que; Albert la llevó a la sala conmemorativa de los Ardlay, frente a las fotografías de sus padres, hermana y Anthony. Esa escena es muy especial, porque Albert le está mostrando a su familia a la mujer que ama y viceversa.

Ese mismo día, Candy y Albert compartieron un sentimiento, y fue el sentirse culpable de la muerte de Anthony. Los dos lloraron, soltaron y se perdonaron. Soltando así la carga de culpabilidad que Candy llevaba por años.

En esa mima sala, Albert le confesó a Candy que él era el tío abuelo William, allí mismo, le entregó el diario que habla de Terry y las experiencias vividas en el San Pablo, como también el broche que lo representa a él. (Albert)

🔶Candy ha elegido el broche (Albert) y el diario (Terry) no lo vuelve a abrir / leer. Dejándole en claro a Albert, quien es su presente y su pasado.

🌸Y no nos olvidemos de la entrevista de Keiko Nagita en Marzo 2019, reafirmando entre quién Candy debe elegir.

¿Y Quien crees que le hace latir el corazón a Nagita al igual que Candy?

R/ ALBERT 💝

Maccha preguntó :

¿Hay algún personaje que prefieras o uno al que estés más apegado?

Entre las parejas que los fanáticos adoran Candy / Terry y Candy / Albert, ¿cuál prefieres?

Keiko Nagita: Mi personaje favorito es Candy.

En términos de parejas, durante todo el proceso de escritura, seguí quejándome de Terry, me dije, el pobre, y al mismo tiempo me dije que Albert era realmente encantador y que me tenía el corazón latiendo mientras escribía (risas). Es algo que no pude expresar en el manga. Sin embargo, los lectores lo habían sentido y me pregunto cómo lo hicieron.

Y para responder a su pregunta, creo que depende de Candy elegir entre Terry y Albert, no lo sé. (Risas)

Lo siento.

enrevista a Keiko nagita por Bulle shoujo . Paris

https://www.bulle-shojo.fr/.../entretien-avec-keiko-nagita/#

🌸Ahora leamos la entrevista que habla de los tres amores y problemas con Igarashi y editor.



Keiko Nagita nació en Tokio en 1949.

Escribió una novela para adultos jóvenes en una revista junior y estuvo a cargo de la historia original de "Candy Candy" bajo el nombre de Kyoko Mizuki en 1975.

Este trabajo fue un gran éxito y se convirtió en un anime popular entre muchos niños y niñas. Desde entonces, ha escrito manga y las novelas originales en paralelo.

Este es un ensayo que cuenta los recuerdos de la escritora de "Candy Candy".

«Mi amiga Candy»

Keiko Nagita, hace 10 años

Han pasado diez años desde que comencé a escribir la historia del manga. Me encantaron los cómics desde que era niña, así que pude ingresar a este mundo sin dudarlo. Las historias que escribí se convirtieron en manga; Estas historias se desarrollaron en las calles de París y Roma, lugares en los que nunca había estado en ese momento. Fue emocionante y divertido. Había muchos lugares sobre los que quería escribir. Las costas de la Costa Azul, las pistas de esquiar de Chamonix, las calles secundarias de Nueva York, solo imaginando ese lugar, me vienen a la mente muchos romances, al igual que las películas.

Las novelas ficticias a menudo requieren precisión histórica y objetiva, pero el manga es mucho más indulgente y permite más libertad. Puede hacer una historia creíble, con países vagos y configuraciones inespecíficas. Fechas, Fiesta de baile. Sentía que podía hacer cualquier cosa, era como si habitara ese país y ese mundo.

En lugar de verlo como un trabajo, descubrí que escribir manga es más un refinamiento, un pasatiempo agradable. Pero también he sentido el manga como indivisible. No podía ignorar la otra mitad.

Al final, la escritura original está sujeta al poder y la influencia del artista de manga.

No importa cuánto pienses que ha escrito el mejor material, siempre habrá algo, no bastante satisfactorio y sujeto a cambios. Pero, por otro lado, hay momentos en los que pensé que era texto sin inspiración, se transformó en algo notable en su forma completa (manga)

No importa cuánto consideres la escritura original, eventualmente al final, el artista de manga ejerce el poder de su obra de arte.

Al final, la historia generalmente va a favor del artista.

De todos modos, quería que mi trabajo fuera uno bueno.

En aquel entonces, los editores me preguntaron si me gustaría colaborar con Yumiko Igarashi. Sabía de su trabajo y habilidad, así que acepté.

Candice White, aunque era huérfana, era una niña brillante y alegre que podría enfrentar dificultades en la vida; su personaje inmediatamente surgió de mi corazón.

Era una heroína sobre la que siempre había querido escribir, como Anne de las tejas verdes y Daddy Long Legs (papaíto piernas largas). Aunque esas historias ya eran muy conocidas, sentí que el tema todavía tenía gran atracción.

Candy y sus personajes secundarios, naturalmente, vinieron a mí como si esperaran su turno para materializarse.

Escribí el manuscrito como si fuera algo imparable.

Cuando finalmente vi, mis ojos se abrieron de par en par.

Allí, desde mi imaginación, la cara sonriente de Candy se hizo realidad. No era solo Candy, delante de mí estaba la cara de la señorita Pony, suave, como el del pan recién horneado; la cara severa pero amable de la señorita Lane. Y luego Anthony, que parecía disolverse en la luz... el guapo Archie, y la cálida esencia de Alistair.

Cuando vi por primera vez a los personajes de mi mente en los dibujos, sentí que el calor de la emoción me invadía. Sentí que estos personajes se moverían solos, sin ninguna aportación mía. Eso resultó ser cierto. No tuve ninguna dificultad para escribir esa historia durante los cuatro años.

Todo lo que pude hacer fue seguir ese camino y continuar mi viaje.

Cuando terminó la serie, los cinco en la gerencia dijeron:

"Ha estado tranquilo sin ningún problema.

Es inusual que una serie continúe sin problemas durante cuatro años, ¿no? "

El Sr. S dijo esto con una cara seria, pero luego puso los ojos en blanco.

"¡Oye! ¡Estoy bromeando! Diablos, borré todo de mi memoria tan pronto como sucedió".

Me quedé boquiabierta, incrédula por lo que acababa de decir. Tuve problemas tras problemas con Igarashi muchas veces.

"Soy el creador original". Dije esto muchas, muchas veces. Fue en ese momento cuando vocalicé el reclamo de propiedad.

En una serie de larga inscripción, con mayor frecuencia, no surgirá un éxtasis. Dicho esto, no puedes cambiar la historia original y hacer que se vaya a otro lado.

Una vez que haya comenzado una serie, la seguiré escribiendo como pretendía.

Me encontré convirtiéndome en la mala de la mafia.

"Sí, qué carajo, lo que digo no se escucha, porque mis opiniones no significan nada, así que mis ideas y mi historia original significan una basura (mi...da)"

Afortunadamente, el editor e Igarashi entendieron de dónde venía.

Pero, como recuerdo desde el pasado, había bajado la cabeza disculpándome por mis arrebatos y demandas. Pero me arrepiento, debí haber mantenido mi posición como la gran mala de la mafia.

Estaba cerca del final de la historia, cuando Stair murió.

En la historia original, Stair fue derribado por el oponente con el que estaba luchando. Pero, en el manga, Stair y su oponente habían hecho un vínculo y su oponente lo había salvado. El avión fue derribado por otro piloto desconocido al azar.

Había peleado sobre esto tantas veces antes. Cuando vi la pieza final entré en estado de shock cuando lo ví y se me rompió el corazón.

Fue una escena importante.

Escribí la última escena con lágrimas porque amaba a Stair.

La guerra no es dulce. Es cruel y despiadado. No existía la amistad con el enemigo. Era algo que no me gustaba, pero era una verdad que quería transmitir en mi escritura.

Resultó bastante espléndido en el manga, pero sentí un profundo agujero en mi corazón.

Supongo que si miras todo el alcance de la historia, puede que no importe quién disparó a Stair. Uno no podría juzgar qué tipo de muerte es mejor. Pero para mí, esta es una parte, la parte de la muerte de Stair que es diferente de mi visión.

En ese momento, sentí profundamente que este trabajo era terrible. Pensé que todo, la historia se había originado todo por mí.

Si hubiera transmitido mi intención original al editor y al artista de manga, en la primera lectura, entonces no creo que me hubiera sorprendido tanto cómo resultaron las cosas.

Debería haber discutido esto más en profundidad. Entonces me di cuenta de que no había un creador "único" para el manga. Cuatro años resultaron ser mucho tiempo.

Hacia el episodio final, sentí que estaba confuso.

Quería llevar a Candy a un lugar hermoso y conversar tranquilamente con ella. Con eso en mi mente, fui a París.

Desde allí, tomé un tren expreso en un viaje de dos horas hasta la provincia de Luynes, donde entré en un hotel que originalmente era un castillo. Fue allí donde comencé a escribir los capítulos finales. El hotel en el bosque era mucho más hermoso de lo que esperaba... cuando entré en la habitación, me rodaron las lágrimas.

Tenía un profundo sentimiento de gratitud por Candy, por lo que ella me había brindado.

Tenía... profundos sentimientos de gratitud por Candy, porque ella me había otorgado muchas bendiciones.

"Por favor, escribe"

La habitación me llamó la atención.

En el centro de la habitación había un antiguo escritorio para escribir, y en la pared, una pintura memorable de una cacería de zorros que me hizo pensar en Candy.

Hablé con Candy mientras escribía esos capítulos finales en esa habitación.

Cuando finalmente bajé mi pluma, sentí la sensación de mi cuerpo flotando, todavía lo siento hoy.

Estaba oscuro fuera de la ventana y escuché el sonido de hojas muertas caer, susurrando en el viento.

En lo profundo de mis pensamientos, contemplé la oscuridad.

“Sí, eso es todo” me dije satisfecha.

No había nada más que escribir, lo sentí con certeza y una profunda sensación de alivio.

Han pasado muchos años desde ese día, pero todavía recibo preguntas sobre ella; principalmente sobre por qué había separado a Candy y Terry, principalmente de manera regañona.

A juzgar por la naturaleza acalorada de sus preguntas, me hacen sentir como si hubiera hecho una grave injusticia a mis lectores.

Pero siempre había planeado la separación, desde el principio.

Pensé en Candy teniendo tres amores en su vida:

-Anthony como su primer amor fugaz, -Terry como su amor intenso y tempestuoso, y finalmente,

-Albert como su amor gentil y destinado, el amor del destino.

Pero Igarashi había creado un Terry demasiado atractivo. Inesperadamente se hizo tan popular que se convirtió en el centro de atención. La gente se enamoró de él, haciendo latir y agitarse el corazón.

Cuando creé esa escena con Candy y Terry, sentí una horrible sensación de opresión en mi pecho. Cuando dejé el bolígrafo, me olvidé de respirar y mis ojos estaban llenos de lágrimas. Había terminado esa escena y me senté sola, tarde en la noche, con el corazón roto.

Mi esposo se había despertado y se sorprendió al ver el estado de mi rostro. Pensó que había muerto alguien en la familia.

Ahora que lo pienso, admito que me vuelvo extraña cuando escribo; es porque me pierdo y me absorbo en ese mundo.

Incluso si realmente amas a una persona, a veces la vida juega un truco cruel que separa a los amantes.

Lo escribí con ese sentimiento, pero mientras lo escribía, también me invadieron sentimientos dolorosos, como si hubiera perdido a mi propio querido.

Incluso después de haber entregado mi manuscrito, todavía sentía esa pesadez en mi corazón.

Más tarde, discutí esa escena con los actores de voz del anime de Candy.

“Todos estaban llorando y fue horrible. Intentamos comer galletas de arroz para distraernos durante la sesión de grabación”, me dijeron.

Mientras inclinaba la cabeza en agradecimiento, sentí una sensación de orgullo. Estaba tan feliz de darme cuenta de que mi historia realmente era algo.

Pero debido a que el artista de manga, también había dado vida a mis personajes, estoy bendecida por esos sentimientos cálidos.

El arte del manga había dado vida al mundo de Candy.

Candy es mi amiga de confianza y mi confidente.

Sí, si la llamo, ella vendría inmediatamente, sosteniendo en sus brazos las flores que recolectó en la Colina de Pony.

"Jidō Bungei 1980.

Traducido por Hidemi FN.